

## 二〇一八年度 入学試験問題

文学部A方式I日程・経営学部A方式I日程・人間環境学部A方式  
GIS(グローバル教養学部)A方式

## 二限国語 (60分)

## 〈注意事項〉

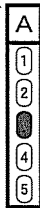
- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 志望学部・学科によって解答する問題が決まっている。問題に指示されている通りに解答すること。指定されていない問題を解答した場合、採点の対象としないので注意すること。
- 四 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。
- 五 問題冊子のページを切り離さないこと。

## マークシート解答方法についての注意

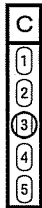
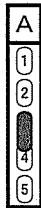
マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読みとって採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一 記入例 解答を3にマークする場合。

(一) 正しいマークの例



(二) 悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

- 二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。
- 三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。
- 四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

●文学部を志望する受験者は、問題〔一〕〔二〕〔三〕〔四〕に解答せよ。

●経営学部・人間環境学部・G I S (グローバル教養学部)のいずれかを志望する受験者は、問題〔一〕〔二〕〔三〕〔四〕〔五〕に解答せよ。

〔一〕 つぎの各問いに答えよ。

問一 つぎの各文の傍線部のカタカナを漢字に直して解答欄に記せ。

- a 恩師のカンレキをお祝いする会が開かれた。
- b 森鷗外は明治時代のブンゴウである。
- c 演奏会が終わった後もヨインに浸っていた。
- d 一年間、父のモに服していた。

問二 つぎの各文学作品の作者を、後の選択肢の中からそれぞれ一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

1 夢十夜

- |               |        |        |         |         |
|---------------|--------|--------|---------|---------|
| ア 泉鏡花         | イ 夏目漱石 | ウ 川端康成 | エ 国木田独歩 | オ 谷崎潤一郎 |
| 2 万延元年のフットボール |        |        |         |         |
| ア 俵万智         | イ 村上春樹 | ウ 安部公房 | エ 大江健三郎 | オ 三島由紀夫 |

(二) つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

鈴木大拙<sup>だいせつ</sup>、本名・貞太郎<sup>ていたろう</sup>は、1870年(明治3年)、金沢に生まれた。幼い頃に父を亡くし、苦勞しながら勉学に励んで英語の教師となった。しかし学びへの意欲は消えず、教師を辞し東京へ出て、哲学、とりわけ仏教思想に心酔した。鎌倉の円覚寺に縁ができ、禅に親しむようになる。「大拙」という号は、僧・釈宗演からもらったものである。27歳のとき、一大決心をしてアメリカに渡った。そのまま彼の地で10年あまりを過ごし、米国文化に親しみ、英語を研鑽<sup>けんがん</sup>するかわら、仏教思想の翻訳と自らの著作に勤<sup>いそ</sup>しんだ。D. T. Suzukiの名は欧米の東洋思想研究者のあいだで徐々に知られるようになっていった。日本に戻ってから世界的な講演活動や英語による執筆を旺盛に行い、禅と日本文化を世界に広めた。心理学者のユング、エーリッヒ・フロムをはじめ、世界的知性と交流を深めた。戦後になって、特に1949年から59年にかけては、主にニューヨークのコーンビア大学を拠点に欧米で講義を精力的に続け、たくさん弟子を育てた。大拙は語っている。「自分は世界人としての日本人だと思っている」と。

粗雑のそしりを恐れず、あえて大胆に言い切ってしまうは、——もとより私は哲学者でもなく、宗教の専門家でもない。一介の生物学者にすぎない——大拙は、存在の妙を問いつけたのだと思う。なぜ私たちはここに存在しているのか？ 私がここに生きているというのはいったいどういうことなのか？ これは実は X 的な問いでもある。哲学の問いだけにとどまることがない。生物学でも同じことを探究している。なぜ生命はこうしてここにあるのか。生きているというのはいったいどういうことなのか、あるいは生命とは何か？ 鈴木大拙に長年師事し、後年は大拙に付き従い助手役を務めた大拙一番の理解者、岡村美穂子さんは次のように述懐している。

《コーンビア大学での大拙先生の講義で、先生が「この世は神様が出てこられて、そして世の中を創造されたというけど、神様はそれ以前はどこにおられたんですか」って質問されたんです。「何をしておられて、どこにおられたんですか。皆さん、誰かわかった人がいたらちょっと立ち上がってください」って。もちろん誰も立ち上がれなかった。そうしたら、静かにご自分

が立って、「ここに<sup>①</sup>ある」とおっしゃったんです。このインパクトはすごかったです。そこには哲学者もいたし、コロンビア大学の先生方もみんなおられました。》

大拙は、「ここに<sup>①</sup>ある」こと、つまり存在の妙について考えた。大拙は、存在の意味について問うにあたって、無心という概念を導入している。大拙の代表作『無心ということ』の序文には次のように書かれている。《自分の考えでは、この「無心」ということが、仏教思想の中心で、また、東洋精神文化の枢軸をなしているものなのである。》そして無心について彼はこう語っている。《今自分らがその世界に立って身辺をみわたすとしましよう。対立の世界を無視すると言ってはいかんが(略)その一つの言い現わし方を、無心ということにしておきたいと、こう思うのです。独坐<sup>\*</sup>大雄峯の世界が無心の世界なのです。》

世界は、ある時点から言葉によって成り立つようになった。言葉によって軸が引かれ、切り分けられ、意味が抽出されるようになった。プラトンやソクラテスが現れ、ロゴス、つまり言葉で論理<sup>ロジック</sup>が組み立てられた。それが客観的とされた。<sup>②</sup>西洋社会は基本的にすべて言葉による客観的<sup>客観的</sup>世界で成り立っている。

米国で生活していると、しばしば言葉に疲れることがある。それは英語が外国語であるという理由からだけではない。米国では沈黙は金ではない。自分が何者なのか、この問題についてどう考えるか、賛成か反対か、絶えず言葉でものごとを語らねばならない。しかし、客観的世界というのは、実は言葉が切り取った恣意的な図式にすぎない。いわば言葉を共有する者たちによる共同の幻想のようなものだ。つまり客観的なものこそまったく主観的なのである。

言葉以前の世界というものがかつてあった。プラトンやソクラテスよりもずっと前、すべてのものは互いに関係し合い、交じり合い、他の区別も曖昧な、自然(ピュシス)があった。言葉がその自然を刈り取り、仕分けし、整地した。そのことによって世界が本来的に持っていたある種の豊かさが失われた。ピュシス(Physis)とは、本来、ここにある、混沌とした、同時に豊かさに満ちあふれた自然を指す曖昧な概念であったが、やがて言葉と論理による整理によって、生理学(physiology)や物理学(physics)へと変質を遂げていった。<sup>③</sup>

東洋世界でも同じことが言えるのではないか。初源的な仏教ですべてのものに生命の存在を認め、それは互いに関係し合

っているものとみなした。それが徐々に言葉によつて、倫理や道德、あるいは極楽と穢土えいどといった二元論による導かれるようになっていった。老荘思想にも、自然は本質的に混沌としたものであったにもかかわらず、そこに目と耳と鼻と口を穿うがつたことによつて、つまり言葉による命名を行ったがゆえに、混沌の生命は失われてしまったとされている。

大拙の説く無心、あるいは禅の思想とは、言葉以前の世界にもう一度立ち返ろうとするものだと私は感じる。言葉を使つてものごとを計算し、言葉を使つて自然を考へる前の世界。興味深いことは、大拙が「無心」を英語で説明するとき、これを childlikeness と訳していることだ。つまり子どものような心。

《人間は考へる輩である。だが、人間の偉大な仕事は彼が計算していない時、考へていない時になされる。無心\*(childlikeness)が永年にわたる自己忘却の修練のうちに回復されねばならぬ。》(鈴木大拙全集「増補新版」第35巻)

禅の中には、言葉はつくりものだという思考がある。だから禅が言葉で語れないのは当然だ。けれども私たち人間が言葉をあやつり、言葉で考へる動物である以上、なんとか言葉で語る努力をしなければならぬ。そこで生まれたのが禅問答や公案\*のような言葉の形式だったのでないだろうか。一見、ロジカルではない。しかし真実を言い当てる間接的な方法としてそれらは編み出された。そんな風に思へる。

私のたずさわる生物学の世界にもまさに符合することがある。生物学の究極の課題は、生命とは何か、という問いに答へることである。近代科学は生命をよりミクロなレベルへと分解し、そのパーツを言葉によつて命名してきた。生物学は、生命体が細胞からなることを見出し、DNAに書かれていた遺伝暗号を解説し、そのすべてを記載することに成功した。その結果、生物学者たちは、生命とは何かという問いに、どう答へることができたのか。それは「生命とは遺伝子を自己複製するシステムである」というものだった。これはこれで全く正しい。しかし一方で、奇妙な違和感が湧き起こってくる。私たちが生命を生命と認めるとき、生命の息吹を感じる時、それは生命に自己複製能だけを見て取るからだろうか。そうではない。言葉が生命をこのように規定する以前に、生命は、あるいは自然(ビュシス)はもつと豊かなものであったはずだ。生命は、たえず流転し、変化し、柔らかく、可変的で、美しいものだ。言葉による切断が、生命の妙をすっかり捨象してしまっている。

「生命とは遺伝子を自己複製するシステムである」という機械論的生命観にとつぷりと浸かつて、ひたすら細胞と遺伝子を切り分けていた私は、あるときそのような反省に目覚めた。生命を捉え直そう、科学の言葉によって定義された機械論的な自己複製のシステムではない生命観を取り戻そう、と。そこから私の探究が始まった。生命をもっとダイナミックなもの、合成と分解を繰り返しながらもバランスを絶えず更新しつづけるもの、つまり動的平衡として生命現象を考えたい。その究明はなお道半ばだし、科学である以上、言葉によって語ることを避けることはできないが、従来の言葉とは違う、より解像度の高い、新しい言葉で語り直したい。動的平衡を一言で言えば、生命は、変わらないために変わり続けるということ。<sup>④</sup>なんだか本当に禅問答みたいである。しかし、生命は(大きく)変わらないために(絶えず、少しずつ)変わり続けている、という意味だ。すこし言葉を補えば腑に落ちるところがあるのも公案に似ていると言えはしまいか。

(福岡伸一「Daisetsu SUZUKI」より。文章を一部改変した)

【注】 \* 独坐大雄峯

この世でいちばん貴く有難いのは、自分がいま生きて、ここに座っているということだ、という意味。

\* 人間は考える葦である

フランスの思想家パスカルの言葉で、人間は葦のようにか弱いけれども、思考するという点で偉大な生物である、という意味。

\* 公案

禅宗で、修行者が悟りを開くために与えられる課題。

問一 空欄  X  Y に入る語として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

- |   |   |    |   |    |   |    |   |    |   |    |
|---|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| X | ア | 実学 | イ | 相對 | ウ | 超越 | エ | 普遍 | オ | 理知 |
| Y | ア | 止揚 | イ | 対偶 | ウ | 諦観 | エ | 分断 | オ | 歪曲 |

問二 傍線部①「ここにある」とあるが、大拙はなぜこのように答えたと考えられるか。その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 西洋の神に関する観念を、東洋的な仏教思想の文脈でもびたりと言い換えて表現できることを示したかったから。

イ 問いの答えになっていないような意表を突いた表現で、日本人らしい発想法の特色を伝えようと思ったから。

ウ キリスト教で説く創造神というのは、西洋人の言葉による虚構にすぎないということを納得させたかったから。

エ 自分が今生きてここに存在することへの実感が、神の始源を考える時も大切な原点になると伝えたかったから。

オ あらゆるものは、過去・現在の時空を越えてつながっているのだという存在の妙を感得させようと思ったから。

問三 傍線部②「西洋社会は基本的にすべて言葉による客観的、世界で成り立っている」とあるが、筆者は西洋社会をどのように捉えているか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 西洋社会における客観は実は不十分であり、自然は混沌としていて言葉による論理では説明しきれないとする東洋的な認識のほうが、正しく客観的な態度である。

イ 西洋社会では、言葉による世界の切り取りが万能ではないと知りつつも、共同の約束事として、言葉で語れないこと、可視化・数値化して客観視できないことは切り捨ててきた。

ウ 西洋社会は、未知のことも含めて、論理的に説明できないものは無いという信念が築き上げたものであり、時に疲れほど、言葉による客観化にこだわる社会である。

エ 西洋社会は、主観を排して真実を論理的に整然と説明できる科学を生み出し、今もその成果を尊んでいるので、東洋的な社会とは、考え方の基底にあるものが対照的である。

オ 西洋社会では、すべてを言葉によって意味づけ分類・整理しようとしてきたが、言葉そのものが人間の主観的な道具なので、実は客観的な社会とは言えない。

問四 傍線部③「豊かさ」とあるが、本文全体においては特にどのようなものを指しているか。適切なものをつぎの中から二つを選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 自他の区別なく、渾然としたつながりを感じられる世界

イ 人間の手が入らない、美しく純粹な原生自然

ウ 永続のために、たえず柔軟に変化し流動する生命

エ 未知の混沌とした現象にあふれていた時代の自然科学

オ 倫理・道徳がなくても調和が保たれる原始共同体社会

問五 傍線部④「なんだか本当に禅問答みたいである」とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 実際は言葉では説明不可能なのに、あえて新しい言葉で逆説的に語ることに挑んでいるから。

イ 一見、矛盾した言い回しでありながら、じつは真実を言い当てている表現だと思ふから。

ウ 手が届きそうでなかなか届かない、解答に長い時間を要する深遠な課題に挑んでいるから。

エ 鈴木大拙の講義での発言のように、意外性により読者の新鮮な興味を惹きつける表現だと思ふから。

オ 洋の東西を問わず世界的な発信をめざした鈴木大拙の業績によく似ていると思ふから。



問六 つぎの各説明文が、本文の内容に照らして適切と考えられる場合は解答欄の a を、不適切と考えられる場合は解答欄の b を、それぞれマークせよ。

ア 筆者がタイトルを「Daisetz SUZUKI」としたのは、鈴木大拙が日本人でありながら世界に通用する知性であったことを表したいためである。

イ 「存在の妙」を説く「無心」は鈴木大拙の独創といえる概念で、神に関する宗教概念を自然科学とも融合させて説明できる可能性を持っている。

ウ 西洋の生理学や物理学などの自然科学は、混沌とした自然(ピュシス)を否定して、整然とした自然を論理的に把握できると見ようとした出発点に誤りがあった。

エ 西洋でも東洋でも、言葉による仕分け以前は、世界は全ての存在が互いに関係し合って成り立っているという自然観があった。

オ 筆者の「動的平衡」の研究は、西洋の生物学の成果を土台に、機械論的な欠点を補うために新たな生命観の確立をめざすもので、それは禅の思想とも通い合う性格をもつ。

問七 「二重傍線部」興味深いことは、大拙が「無心」を英語で説明するとき、これを *childlikeness* と訳していることだ。つまり子どものような心」とあるが、筆者が「子どものような心」を重視するのはなぜか。その理由を、四十字以上、五十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

〔三〕 つぎの文章は、平家滅亡後、捕らえられて京都へ連行された総大将・平宗盛(大臣殿)が、幼い子息・副将(若君)としばらくぶりに対面する場面を記したものである。これを読んで、後の問いに答えよ。

若君<sup>わかきみ</sup>ははるかに父を見奉り給ひて、よに嬉しげにおぼしたり。「いかに、これへ」とのたまへば、やがて御膝<sup>おんひざ</sup>のうへに参り給ふ。大臣殿、若君の御ぐしをかきなで、涙をはらはらと流いて、守護の武士どもにのたまひけるは、「これは、おのおの聞き給へ、母もなき者にてあるぞとよ。この子が母は、これを産むとて、産をば平らかにしたりしかども、やがてうち臥して悩みしが、『いかなる人の腹に公達<sup>きんたち</sup>をまうけ給ふとも、思ひかへずして育てて、わらはが形見に御覽<sup>a</sup>せよ。さし放つて、乳母<sup>めのと</sup>なんどのもとへつかはすな』と言ひしことが不憫<sup>ふびん</sup>さに、あの右衛門督<sup>うゑもんのかみ</sup>をば、朝敵をたひらげん時は大將軍せさせ、これをば副將軍せさせんずればとて、名を副將と付けたりしかば、嬉しげに思ひて、すでに限りの時まで、名を呼びなんどして愛せしが、七日といふにはかなくなりてあるぞとよ。この子を見るたびごとには、そのことが忘れがたくおほゆるなり」とて、涙もせきあへ給はねば、守護の武士どもも皆、袖をぞ絞りける。右衛門督も泣き給へば、乳母も袖を絞りけり。やや久しくあつて大臣殿、「さらば副將、とく帰れ。嬉しう見つ」とのたまへども、若君帰り給はず。右衛門督これを見て、涙をおさへてのたまひけるは、「やや副將御前<sup>ごぜん</sup>、今宵<sup>こよひ</sup>はとくとく帰れ。ただいま客人<sup>まかし</sup>の来うずるぞ。明日は急ぎ参れ」とのたまへども、父の御浄衣<sup>おんじやうえ</sup>の袖にひしと取り付いて、「いなや帰らじ」とこそ泣き給へ。

かくてはるかに程ふれば、日もやうやう暮れにけり。さてしもあるべきことならねば、乳母の女房抱き取つて御車に乗せ奉り、二人の女房どもも袖を顔に押し当てて、泣く泣く暇申しつつ、ともに乗つてぞ出でにける。大臣殿はうしろをはるかに御覽じ送つて、「日頃の恋しさはことの数ならず」とぞ悲しみ給ふ。

(『平家物語』より)

【注】 \*右衛門督 平清宗。宗盛の長男で、副將の兄。

問一 傍線部「やがてうち臥して悩みし」を現代語訳し、解答欄に記せ。

問二 二重傍線部 a「御覽ぜよ」b「奉り」は誰に対する敬意を示しているか。最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 宗盛                    イ 副将                    ウ 副将の母                    エ 公達                    オ 乳母                    カ 清宗

問三 波線部 A「せさせんずれば」B「忘れがたくおぼゆるなり」の文法的説明として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

A せさせんずれば

ア 動詞＋助動詞(尊敬)＋助動詞(意志)＋助動詞(打消)＋助詞

イ 動詞＋助動詞(意志)＋助動詞(打消)＋助詞

ウ 動詞＋助動詞(使役)＋助動詞(意志)＋助詞

エ 動詞＋補助動詞＋助動詞(意志)＋助詞

オ 助動詞(使役)＋助動詞(意志)＋助詞

B 忘れがたくおぼゆるなり

ア 動詞＋形容詞＋動詞＋助動詞(受け身)＋助動詞(断定)

イ 動詞＋動詞＋助動詞(自発)＋助動詞(伝聞)

ウ 動詞＋動詞＋助動詞(完了)＋助動詞(断定)

エ 動詞＋形容詞＋動詞＋助動詞(伝聞)

オ 動詞＋形容詞＋動詞＋助動詞(断定)

問四 空欄

X

には「甚だしく」の意味をもつ語が入る。その語として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア あたら

イ こころづきなく

ウ すずろに

エ なのめならず

オ やんごとなく

問五 傍線部2「さてしもあるべきことならねば」の解釈として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア いつまでも日は沈むのを待ってくれるというわけでもないから

イ いつまでも人々は宗盛と副将とともに暮らしてゆきたいと思ったが

ウ いつまでも宗盛は副将の世話ができるはずもなかったので

エ いつまでも宗盛も副将も生きていられる状況ではなかったので

オ いつまでも副将を宗盛のもとに留めておくわけにもゆかないから

問六 傍線部3「日頃の恋しさはことの数ならず」の解釈として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 今日の副将との別れがあまりにもつらく思われ、これまで副将と会った回数も忘れてしまうほどだ

イ 日々副将に会いたいと思つてきたけれど、これからはその思いがますます強まることであろう

ウ これまで副将に会えず恋しく思つてきたが、それは今日の別れのつらさに比べるとたいしたものではない

エ これまで副将と会えず、恋しく思つてきたつらさに、さらに今日の別れのつらさが加わることになった

オ 副将と会えず、つらい思いをしてきたことはたびたびあったが、今はその数も数えきれないほどだ

問七 本文の内容に合致するものをつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 妻と死別して長い年月を過ごした宗盛は、副将と会い、これまで記憶の彼方にあつたその母の遺言を思い出し、悲しみを新たにした。

イ 臨終が近づいた副将の母は、宗盛の許しを得て愛するわが子に副将という名前を付け、安らかな心のうちに死を迎えた。

ウ 宗盛の子である清宗と副将は、幼いときから大將軍・副將軍として育てられ、源氏との合戦の際にもその地位で出陣した。

エ 副将の母と宗盛をめぐるエピソードを聞いた警護の武士たちは、宗盛の優しさを知り、次第に彼に対して心を開いていった。

オ 副将の母は、宗盛が他の夫人との間に子をなすことは容認していたが、副将のことは宗盛自ら養育することを懇願した。

問八 『平家物語』とは異なる時代に成立した文学作品をつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 今昔物語集

イ 宇治拾遺物語

ウ 新古今和歌集

エ 金槐和歌集

オ 方丈記

●つぎの問題〔四〕は、文学部を志望する受験者のみ解答せよ。

〔四〕 つぎの文章は、鼠を用いた教訓譚である。これを読んで、後の問いに答えよ（設問の都合で返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。

永<sup>えい</sup>有<sup>り</sup>某<sup>ナル</sup>氏<sup>者</sup>。畏<sup>レ</sup>日<sup>ヲ</sup>拘<sup>ハルコト</sup>。忌<sup>異</sup>甚<sup>シ</sup>。以<sup>モ</sup>為<sup>ヘラク</sup>己<sup>ノ</sup>生<sup>マレシ</sup>。歳<sup>ハ</sup>直<sup>アタリ</sup>子<sup>ニ</sup>、鼠<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>神<sup>也</sup>也<sup>ト</sup>。

① 因<sup>リテ</sup>愛<sup>シ</sup>鼠<sup>ヲ</sup>、不<sup>レ</sup>畜<sup>ヤシナハ</sup>猫<sup>犬</sup>、禁<sup>ジテ</sup>僮<sup>勿</sup>。勿<sup>レ</sup>擊<sup>ツコト</sup>鼠<sup>ヲ</sup>。倉<sup>サウ</sup>廩<sup>リン</sup>庖<sup>ハウ</sup>厨<sup>チウ</sup>、悉<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>恣<sup>ハシ</sup>。鼠<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>問<sup>ハ</sup>。

由<sup>ア</sup>是<sup>ヲ</sup>鼠<sup>相</sup>告<sup>ゲテ</sup>、皆<sup>ケル</sup>来<sup>ニ</sup>某<sup>氏</sup>。飽<sup>スレドモ</sup>食<sup>ム</sup>而<sup>シテ</sup>無<sup>シ</sup>禍<sup>ハ</sup>。某<sup>氏</sup>室<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>完<sup>ク</sup>器<sup>、</sup>椀<sup>無</sup>完<sup>ク</sup>衣<sup>、</sup>飲<sup>食</sup>大<sup>率</sup>鼠<sup>之</sup>余<sup>也</sup>。昼<sup>ハ</sup>累<sup>累</sup>与<sup>ト</sup>人<sup>兼</sup>行<sup>キ</sup>、夜<sup>ハ</sup>則<sup>チ</sup>窃<sup>セツ</sup>鬻<sup>ゲツ</sup>鬪<sup>トウ</sup>暴<sup>ハ</sup>。其<sup>ノ</sup>声<sup>、</sup>飲<sup>食</sup>大<sup>率</sup>鼠<sup>之</sup>余<sup>也</sup>。昼<sup>ハ</sup>累<sup>累</sup>与<sup>ト</sup>人<sup>兼</sup>行<sup>キ</sup>、夜<sup>ハ</sup>則<sup>チ</sup>窃<sup>セツ</sup>鬻<sup>ゲツ</sup>鬪<sup>トウ</sup>暴<sup>ハ</sup>。其<sup>ノ</sup>声<sup>、</sup>

万<sup>ニシテ</sup>状<sup>、</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>カラ</sup>以<sup>テ</sup>寢<sup>イヌ</sup>。終<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>厭<sup>イトハ</sup>。数<sup>ニシテ</sup>歳<sup>、</sup>某<sup>氏</sup>徙<sup>ウツリテ</sup>居<sup>ニ</sup>他<sup>州</sup>。後<sup>ニ</sup>人<sup>来</sup>居<sup>ルニ</sup>鼠<sup>②</sup>。

為<sup>態</sup>如<sup>故</sup>。其<sup>ノ</sup>人<sup>曰</sup>、是<sup>レ</sup>陰<sup>類</sup>、惡<sup>物</sup>也。盜<sup>暴</sup>尤<sup>甚</sup>。且<sup>③</sup>何<sup>以</sup>至<sup>是</sup>乎。

哉<sup>。 仮</sup>二<sup>五</sup>六<sup>猫</sup>、闔<sup>レ</sup>門<sup>ヲ</sup>撤<sup>レ</sup>瓦<sup>、</sup>灌<sup>レ</sup>穴<sup>、</sup>購<sup>レ</sup>僮<sup>羅</sup>。捕<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>。殺<sup>ス</sup>鼠<sup>如</sup>丘<sup>、</sup>棄<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>。隱<sup>也</sup>。

處<sup>ニ</sup>臭<sup>キコト</sup>。数<sup>月</sup>乃<sup>ニシテ</sup>已<sup>ヤム</sup>。嗚<sup>呼</sup>、彼<sup>④</sup>以<sup>其</sup>飽<sup>食</sup>無<sup>禍</sup>為<sup>可</sup>恒<sup>也</sup>哉。

（柳宗元「永某氏之鼠」より）

【注】

\*永 唐代の州名。

\*畏日拘忌 日の良し悪しを気にして物忌みにこだわる。

\*倉廩庖厨 倉庫や台所。

\*梳 衣掛け。

\*羅捕 網で捕まえる。

問一 傍線部①「因愛鼠」とあるが、「某氏」が鼠を愛した理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 子宝に恵まれた年の干支がちょうど鼠だったから。

イ 鼠は子たくさんなので縁起が良いと考えたから。

ウ 自分が生まれた年に家の鼠もちょうど子を生んだから。

エ 鼠は夭折した自分の子の生まれ変わりと思いこんでいたから。

オ 自分が生まれた年が子年だったから。

問二 波線部 a「由是」b「尤」の読みを、送り仮名も含めてひらがなで解答欄に記せ。

問三 傍線部②「鼠為態如故」の解釈として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 鼠の態度には何か理由があるように見えた。

イ 鼠は以前と同じようにふるまった。

ウ 鼠の態度はわざとらしく見えた。

エ 鼠は新しい住人に対し友人のように接した。

オ 鼠のふるまいが以前よりおとなしくなった。

問四 傍線部③「何以至是乎哉」を現代語訳し、解答欄に記せ。

問五 傍線部④「彼以其飽食無禍為可恒也哉」の書き下し文として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 彼は其の飽食するを以て禍無く恒にすべしと為したるか。

イ 彼は其の飽食して禍無きを以て可と為し恒ならんか。

ウ 彼は以て其れ飽食し禍無くして恒にすべしと為したるか。

エ 彼は其の飽食して禍無きを以て恒なるべしと為したるか。

オ 彼は其の飽食するを以て禍無く可と為し恒ならんか。



問六 本文から読み取ることのできる教訓として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 一時的に好き放題ができていても、それがいつまでも許されるとは限らない。
- イ 以前は味方をしてくれていた相手でも、豹変して敵になる可能性がある。
- ウ 根拠のない迷信にとらわれていると、事物の本質を見抜けず大損してしまう。
- エ どんなに人に親切にしても、恩をあだで返される可能性がある。
- オ 徒党を組んでわがままを通していると、仲間を失った後にわざわざに遭う。

● つぎの問題〔五〕は、経営学部・人間環境学部・GIS(グローバル教養学部)のいずれかを志望する受験者のみ解答せよ。

〔五〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

「コミュニケーション能力」は現在、働く者にとって、もつとも重要とみなされている。試しに、ネット書店で、「コミュニケーション」を検索欄に打ちこんでみるとよい。上位を占めるのは、いわゆるビジネス書(ひと昔前の呼び方では「ハウツー本」)のたぐいである。「新入社員に求めるもの」といった調査でも、「コミュニケーション力」はつねに上位にある。なかには「あいさつ力」などという、ちょっと吹き出してしまふような能力が登場する調査もあるが、あいさつとはまさに、言語学者ロマーン・ヤーコプソンのコミュニケーション・モデルにおける「交感的」メッセージ(私はコミュニケーションをする用意がありますよ)ということだけを伝えるメッセージ)である。

このように、現代の労働者はコミュニケーションを強制されている。ただし、この「コミュニケーション」は、そのもつとも広い意味におけるそれではない。あくまで、「双方向的コミュニケーション」なのである。日本の企業では、「指示待ちはダメ」ということがよく言われる。これを言いかえれば「受信をしているだけではダメ」ということであろう。労働者は、命令を受信したら、それを自律的に解釈し、適切な行動に移さなければならぬ(つまり、「発信」せねばならない)。

労働者は、と述べたが、コミュニケーションは、労働に限らず私たちの生活のすべてを覆っているようにも思える。それがどれほど根深いかを理解するためにも、「双方向的コミュニケーション」をすべて絶つた生活を想像してほしい。おそらく、(これはあくまで典型でしかないが)「ひきこもり」といったイメージがその極端な例だろう。

「ひきこもり」というのは、かならずしも、もつとも広い意味でのコミュニケーションを絶つた人ではない。おそらく「受信」はしている。テレビを見る。雑誌を読む。インターネットを閲覧する。しかし、現在支配的なコミュニケーション空間において、受信だけすることは、コミュニケーションとはみなされない。発信も含めた、双方向的コミュニケーションがあつてこそ、

社会に存在しているとみなされるのである。

だから私たちは、双方向的なコミュニケーションの回路に開かれていることを、必死で示そうとする。その結果、逆説的なことだが、世の中には無意味なメッセージが氾濫することになる。どういうことか。ここでも先ほどの「交感的メッセージ」がキーワードになる。つまり、「私は双方向的コミュニケーションに開かれていますよ」ということを示すためのメッセージが氾濫することになるのだ。自分のケータイの送信フォルダを、または自分のブログのエントリーやコメント欄を見返してみればよい。「おはよう」、「いま何してる?」、「別に」、「おやすみ」——私たちは、ときとして、こうしたごく単純な(そして無意味な)メッセージを受信し送信することに、奇妙なやすらぎを覚える。その一方で、「意味のありすぎる」コミュニケーションばかりをつづけることには、耐えられなくなっている。

さてそうすると、労働の場で求められるものと、それ以外の生活で求められるものが、非常に似ていることになる。新入社員にコミュニケーション力を求めるのは、現代の若者のコミュニケーション力が低下しているからだろうか。けっしてそうではない。それどころか、現代の若者は非常に旺盛なコミュニケーションを行っている。おそらく、変わったのは新入社員の間ではなく、労働の場のほうである。労働市場は、私たちに、コミュニケーション力を「売る」ように求めてきているのだ(正当な価格で買ってくれるかどうかは保証のかぎりではないが)。

以上のような事態は、<sup>②</sup> ポストフォードイズムという名で呼ばれることがある。イタリアの経済学者クリスティアン・マラツツイヤ、同じくイタリアの哲学者パオロ・ヴィルノは、ポストフォードイズム状況においてコミュニケーションが重要になったことを指摘している。ポストフォードイズムとは何か。それは文字どおりには「フォードイズム以降」を意味するので、先に「フォードイズム」を理解する必要があるだろう。この言葉は、自動車メーカーのフォードに由来している。フォードは、規格化された製品を、工場で大量生産する方式を確立した。それは福祉国家体制での完全雇用・高賃金を基礎とする大量生産・大量消費を前提とするのだが、労働の場そのものの典型イメージは、ベルトコンベアのそばで行われる機械的な労働である。ここでは労働者は、おしゃべりをしてはならない。自律的な判断も求められない。中央集権的に管理された生産システム内の部

品となることが求められるのだ。チャーリー・チャップリンの『モダン・タイムス』を想起してもらってもいいだろう。

これに対するポストフォーダイズムは、規格品を大量に生産し、在庫を大量に保持するのではない。それは、市場の需要にフレキシブルに対応するために、在庫を減らし、「オンデマンド」でジャストインタイムな生産を行う。つまり、需要量にできるだけ応じた量の生産をし、ムダを減らそうとする。コストを最小化するために、部品ばかりか、労働力もまた、必要に<sup>デマンド</sup>応じて集められる（もしくは手放される）。雇用と賃金は、めまぐるしく変化する市場の需要に応じて調整される。労働組合は弱体化され、雇用は不安定になる。西欧諸国においては、そしてさらにはグローバルに、このポストフォーダイズムは一九八〇年代の新自由主義の登場と X と言っているだろう。新自由主義とは、一般的に、国家が福祉を受けもち市場に介入する福祉国家体制とは対照的なものとされる。新自由主義は、国家の市場への介入を弱め、自由競争を肯定する。日本では、一九九〇年代以降の「民営化」の波や、「自己責任」論の隆盛、「格差社会」の到来などを考えればよい。

実のところ、ポストフォーダイズムの雛形となるのは、一九五〇年代のトヨタ自動車における、いわゆる「トヨタイズム」もしくは「トヨタ生産方式」であった。現在では先ほど述べた「ジャストインタイム生産方式」とも言われる「<sup>\*</sup>かんばん方式」は、「作りすぎ」や「在庫」、「不良品」など七つの「ムダ」を排除する方式として考案された。この方式は、フォーダイズム的なオートメーション化との差異化をはかって、自動化ならぬ「自働化」と呼ばれる。品質管理を、つまり不良品を減らすことを目的とし、工場の現場で異常が起こった場合に、生産ラインを一旦止めて、その不具合が起こったセクターで自律的に問題解決を図っていくということ、これが自働化である。現在がポストフォーダイズム状況であるとして、それはトヨタイズムが社会のあらゆる場所へと浸透した結果であるとも言える。

この「自働化」のキーワードがコミュニケーションだ。労働の現場において、上からの指示をだまっただけでは、良しとされない。私たちは、積極的に相互コミュニケーションをとり、現場の改善をすることが求められる。

中央集権的労働から、「自働的」な労働へ。あるいは、黙々と労働するあり方から、個々の現場が自律的にコミュニケーションをとりあう労働へ。これが、フォーダイズムからポストフォーダイズムへの移行である。フォーダイズムと違い、労働者は

現場でおしゃべりすることが推奨される。いや、それどころか、適切なコミュニケーションをとる能力と実践を、いまや私たちは強いられている。これが、一方向的通信としてのコミュニケーションから、双方向的通信としてのコミュニケーションへの移行と並行関係にあるのは偶然ではあるまい。個々の労働者をみた場合、求められるのはコミュニケーション能力に加えて、柔軟性、自己マネジメント能力、自律性である。③といふと、どれも個人にとってすばらしい資質だ、と思われるかもしれない。しかし、パオロ・ヴィルノが指摘するように、従来「仕事」とは切り離された個人の資質であったはずのこういった資質が、いつのまにか労働へとくりこまれて「資源」とされ、「資本」とされてしまったのなら、そうも言ってはいられないはずだ。それらの能力がすばらしい、という思い込み自体が、いったいどこから出てきたのか、そしてその思い込みによって得をするのはいったい誰なのかを、考える必要があるようだ。

労働者に求められるコミュニケーション力と、日常的なコミュニケーション力との間に、区別はなくなっている。これはある意味、当たり前である。当のコミュニケーション力は、個々の人間がもっている能力なのであり、その個々の人間は労働者ということもあればそうでないこともあるのだから。しかし、もしかすると、労働とそれ以外の生活の間の、肝心の区別があいまいになってきているのかもしれない。働いていないときに、自分は労働とはまったく関係のないことをしていると、自信をもつて言えるだろうか？ コミュニケーション能力を高め、いつでも使えるように、潜在的に保持しなければならぬという意味では、雇用状態と失業状態との間に区別はないのかもしれない(そして、雇用と失業の間の垣根を低くすることこそ、ポストフォーダイズムのねらいである)。<sup>③</sup>これは絶望的なヴィジョンだ。

だからこそ、柔軟な双方向的コミュニケーション以外のコミュニケーションを「思い出す」ことが、重要なのである。おそらく、「コミュニケーション」の支配的な意味が前提としている、「コミュニケーション能力をもち、それを行使してほかの個人とコミュニケーションする個人」という考え方そのものを再考する必要があるだろう。

(大貫隆史・河野真太郎・川端康雄『文化と社会を読む 批評キーワード辞典』より。文章を一部改変した)

【注】 \*かんばん方式 トヨタが始めた生産方式。「かんばん」とは、部品箱に付けられたカード。部品がどれだけ必要か、

すぐにわかる仕組みになっている。

問一 傍線部①「もつとも広い意味におけるそれ」とあるが、その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 社会に開かれているコミュニケーション。
- イ 一方的な発信受信をも含めた伝達。
- ウ 無意味なメッセージと有意義なメッセージ。
- エ あいさつなどの交感的な意思表示。
- オ 自発的で積極的な発信。

問二 傍線部②「ポストフォーダイズム」における生産システムの説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 国家が市場に介入することを拒み、個人が自由に競争できる市場を経営するシステム。
- イ 労働者の資質や能力に合った仕事を提供し、個人の自律性を向上させてゆくシステム。
- ウ 完全雇用と高賃金を実現するために、大量生産と大量消費を押し進めるシステム。
- エ 作りすぎや不良品などの無駄なコストを削減し、必要な分だけを供給するシステム。
- オ めまぐるしく変化する需要に応じ、満足度が最適となるよう価格を調整するシステム。

問三 空欄

X

に入る表現として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 鎚しのぎを削っていた
- イ 軌きを一いっにした
- ウ 拮抗きっこうしていた
- エ 人口に膾炙かいしした
- オ 肝胆相照かんたんあひてらしていた

問四

傍線部③「これは絶望的なヴィジョンだ」とあるが、筆者がそのように評するのはなぜか。その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 意味のありすぎるコミュニケーションが重視されるようになったことで、社会人も就職前の若者も、人間的なやすらぎを忘却しかけているから。
- イ 労働者たちの中に、コミュニケーション能力や自己マネジメント能力などを高めなければならないという強迫観念が広がってゆくことになるから。
- ウ 労働組合が弱体化され雇用が不安定になると、人々の間で競争が激化し、結局は、労働者の間でも失業者の間でも、格差がより大きくなってしまいうから。
- エ 労働時間が増えてゆくと、個々人は、コミュニケーション能力を駆使して多様な他者と交流する機会を漸次的に失ってゆくことになるから。
- オ 仕事をしていてもいなくても、個々人は自身の能力を向上させるよう努めるが、事実上それは、労働のための資本として利用されることになるから。

問五

二重傍線部「現代の労働者はコミュニケーションを強制されている」とあるが、労働者がそのように強いられるのはなぜか。その理由を、四十字以上、五十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

